自信を持って手話が使えるきっかけに

東大の酒井邦嘉准教授のＭＲＩ調査に協力しています

児童指導員　森本行雄

「手話は言葉ではない」「身ぶりと同じ」――かつて、教育現場などで手話を否定する人たちの主張の多くは、このようなものでした。この考え方によって、聞こえない子どもたちや親たちが、手話の使用を禁止されてきました。

でも、手話は言語であり、日本語や英語と同様であることが、今では科学的にも証明されてきています。その研究方法の一つが、言語と脳の関係を研究すること。医療で使用されているMRI(磁気共鳴画像装置Magnetic Resonance Imaging system)によって、手話を理解する時に日本語で音声を聞く時と同じ脳の部位が活発になることが解明されています。

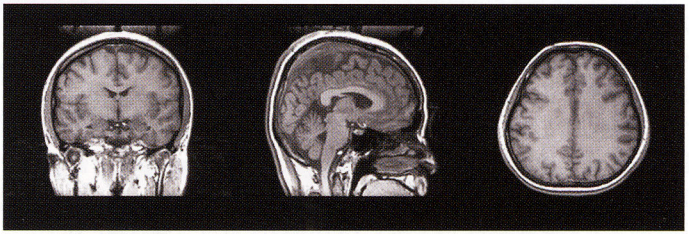
その研究の第一人者が、東京大学大学院で言語脳科学を研究している酒井邦嘉准教授です。

酒井先生は、アメリカの大学で聴覚障害学生と共に学んだ経験があります。その際に付いていた手話通訳者が講義を手話ですべて翻訳できているところを見て、言語としての手話に強く関心を持ったそうです。

昨年の9月に酒井先生が金町学園に来園し、児童や職員と交流したことをきっかけに、金町学園でもその研究に協力することになりました。11月から、学園の児童と聴覚障害の職員が東京都目黒区の東京大学駒場キャンパスに行き、MRIによる調査に協力しています。この機器は強い磁気を発生させるため、人工内耳の装用者は調査対象者にはなれないため、数人の児童はあきらめざるを得なかったのですが、今後の予定も含めその人数は約10人となっています。

自分の脳が見られた

「自分たちの協力で、手話の研究が進むならとても嬉しい」という声から、「病気でもないのにMRIを体験して、自分の脳の画像を見ることができた」(上写真)という驚きまで、児童の中でも反応は様々。でも、キャンパスの雰囲気に初めて触れることで大学に関心を持ったり、手話に改めて興味を持つ児童もいて、普段はなかなかできない体験を通じて世界を広げる機会になっています。



この調査協力が、手話という自分たちの言葉について理解を深め自信を持って使える、そのきっかけになってもらえると嬉しく思います。

なお、調査の方法は、ＭＲＩで頭部を撮影しながら、簡単な問題に答えるものです。その内容は、「会話」「表現」「言葉」「繰り返し」の４つの課題に分けられていて、それぞれ手話で表現されます。その表現の間違いを探して、ボタンを押すだけの方法ですから、子どもたちでもすぐに覚え、約１時間半ですべてが終了しています。金町学園の児童、職員だけではなく、多くの方の協力があれば手話の言語としての研究が更に進むと感じました。

（もりもと ゆきお）